

環境マイスターの取り組み・生き方から「水俣」を考える教材の作成

— 「天野茂ものがたり」～ほんものの紅茶を求めて～ —

岩 瀬 幸 子 神奈川学園中学・高等学校

— 「すべてのものが海に行く」を 人生の根幹に据えて生きる —

1. 水俣フィールドワークについて

神奈川学園中学・高等学校は、横浜駅から徒歩 15 分くらいの所にある、中高一貫の女子校である。1 学年は、1 クラス 40 人前後で 5 クラス、全校約 1200 人。宗教色のない学校として「自覚」「心の平和」「勤勉」を校訓に、次の時代を見据えた人間教育を実践している学校である。

2001 年から高校 2 年生にフィールドワークを導入し、京都・奈良、沖縄、四万十川、水俣の 4 つの地域から生徒を選び、3 泊 4 日の現地研修と 1 年間の事前事後学習を行ってきた。2010 年からはカリキュラムを移行し、中学 3 年生がフィールドワークに取り組んでいる。

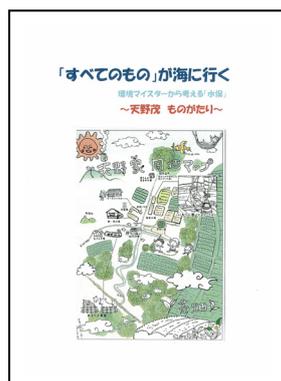
水俣地域では、40 人前後が選んできています。「人間の尊厳を考える」「豊かさを考える」ことを目指し、現地プログラムでは水俣病の患者の方や支えてきた方に出会い、水俣病について考えてきた。また、山での生活体験を行う中で豊かさとは何か考える機会としてきた。

事前事後学習の中では、水俣病の問題を学習し、それぞれに自分のテーマを持って現地に行き、事後でさらにテーマを深め、レポート製作に取り組んでいる。学習を進めたり、テーマ学習を行っていくための書籍類はたくさんあるが、その多くは水俣病関係であり、山での生活体験から「豊かさとは何か」や「水俣市の環境の取り組み」をテーマに選んだ生徒には提供できる資料が少ないのが課題になっていた。

2. 学習教材作成にあたって

水俣市では、水俣病を教訓に、環境モデル都

市づくりの取り組みを進め、「安心安全で環境や健康に配慮したものづくり」の推進と、職人の更なる地位と意識の向上を図ることを目的として、平成 10 年度に全国初の取り組みとして「環境マイスター制度」を確立した。



天野茂さんは、無農薬のお茶・紅茶つ

くりで水俣市の環境マイスターに認定されている。環境問題や地元学を学んでいる自治体の人や大学のゼミなど多くの方が「天の製茶園」を訪れ、学ぶ場にもなっている。また、神奈川学園の水俣フィールドワークで大事な役割を担ってきた方である。

「天の製茶園」での山の生活体験は、自分たちでお茶の葉を摘み、煎って飲んで、お茶を作る。山の散歩の中で山菜や木の実を採り、昼食づくりをする。山で遊ぶ等々。

横浜の都会で物にあふれ、便利な生活を住んでいる生徒たちにとって、天野茂さんと過ごす一日は、豊かな自然とおいしさと豊かな時間、それらが体をくぐって実感できるものになっている。

FW では様々なことを学びましたが、私が印象に残ったことは、「豊かさ」とは何かについてです。豊かさと言われると、便利な社会であることだと思いますが、便利ではなくても豊かさはあるのだと実感しました。天の製茶園に行ったのですが、周りは自然に囲まれていてコンビニやスーパーなどというものはありませんでした。しかし、

森を散策すると食材がたくさんあったし、山でダイコロという乗り物で遊んだのもとても楽しかったです。全然不便ではなかったです。

(冊子より) 中 3

「環境」や「豊かさとは何か」を考える教材づくりを考えたときに、生徒の実感からスタートできる天野茂さんに視点を当てていくことがよいのではないかと思い、今回委託研究員の機会を得て取り組んだ。

3. 冊子の構成

天野茂さんのインタビューを中心に生き方や取り組みをまとめていく中で問題提起を試みた。また、中学3年生の女子を対象にしているため、写真やイラストを多くし、読みやすいものになるよう意識している。

《 柱を4つに 》

環境についての考え方・「ここで生きる」と現実を切り拓いてきたこと・「ほんもの」のお茶紅茶づくり・人とのつながりを大事にしていること、この4つの視点を柱にして内容をまとめ、大きく5つの章に分けて構成した。

第1章：環境について・今の取り組み

第2章：水俣市概要と環境マイスター制度

第3章：天野茂さんの歴史

第4章：広がる活動

第5章：今後に向けて

《 第1章：すべてのものが海に行く 》

環境についての考え方や、今取り組もうとしていることについてまとめた。結論的な所を先に持って行った方が生徒にはわかりやすいと思い、最初に持ってきた。

無農薬のお茶や紅茶作りを行ってきた天野茂さんだが、環境を意識して始めたというより、親の跡を継ぎ、自分の道を切り拓いていくときに選び取ってきた道だった。その自分で選んできた道が、環境について考えたとき、どうい

意味があるのかを確信していったことが分かる。その中で人の出会いが印象的だった。



杉本栄子さんは、神奈川学園のフィールドワーク第1回目から、水俣病の語り部として生徒たちに思い

を語ってくださった方である。水俣病患者として自分のことを話すだけではなく、生徒の弱さを温かく受け止めてくださることが、生徒自身の生き方を考えることにつながっていくような方だった。

山のもの天野茂さんは、海のもの杉本栄子さんに会って、山での生活を考えたという。杉本栄子さんが、初めて天野さんの所を訪れた時に、源流という意味で乾杯する前にお酒を川に流した。海の人たちが、いかに山を大事にするか、その姿から感じ、以下のように語った。

海のこととか知らなかったけど、「山」と「川」と「海」、それが「つながっている」そう思った。山の上の人は困らなくても、海の近くに住んでいる人たちは非常に困ることもある。なんでも海に流れていく。何も知らなかったが、それがわかった。「あ～全部海に行くんだ」ということは自分にとって衝撃だった。「無農薬のお茶づくりは、自分の生活を守るためだったし、持続可能な農業をしていくためでもあった。そのことを持つ意味を、栄子さんと会って、改めて考えることができた。

(冊子より)

環境を考えていく時に「山」と「川」と「海」の繋がり、都会の生活も繋がっていくという視点を持ちたい。「すべてのものが海に行く」そして、それがまた私たちに返ってくることをきちんと据える必要性を思い、冊子の題名にした。

自然豊かな天野茂さんの家の周辺での変化、ハッチョウトンボやクレソン・田んぼにいたホ

タルが減少しているここ1～2年。田んぼを作らなくなってきたことが背景にある。

トンボもクレソンもなくなって、農業を維持していくことの価値を改めて考えさせられた。田んぼって環境を守るためにすごい役目があった。田んぼを作るために水路を作り、草を刈り、小川ができる。そこに生き物たちが生活する環境ができる。農業を維持していくことは自分の生活だけでなく、環境を守っていた。田んぼじゃなくても、土地を使うということ。里山を守るといのは生活、暮らしというのが景観につながっていくんだと改めて思った。(冊子より)

と語っている。「環境」を守ることは「生活」に繋がっている。生産者の天野茂さんは、農業をし、その生活を作る。消費者である私たち自身はどのような生活をしていくかが問われているのだと思う。生徒には「自分は・・・？」と自分の生活を問い直す問題提起をしたい。



《 第2章：天野さんはどこで何しているの？ 》
天野茂さんの住む水俣市と石飛(いしとび)地域の概要。そして、天野茂さんが認定されている水俣市の環境マイスター制度について説明をした。

《 第3章：無農薬でお茶を作る 》

「天野茂ものがたり」として、インタビューした話をまとめていった。

天野茂さんが親の跡を継ぎ、「ここで生きる」と決意し、お茶づくりをしていく。以下のように自分の道を選び取っていった生き方をたどった。



大事なのはどこにいるかじゃなくて、自分の思いと生き方が大事だと思ってね。結局はどこにいても自分は自分だと思う。(冊子より)

「水俣」は水俣病があった。水俣産の物は魚だけでなく、農作物も売れない時期があった。今の福島と同じ、風評被害が続いていた。更に受け継いだお茶の木は在来種で、なかなか売れない。妻の病気もあり、無農薬のお茶づくりをする決断をしていった。

「水俣」で「親から受け継いだ土地」で生きるために「完全無農薬」のお茶づくりを選び取った。現実を切り拓く道は、差別化を図ることができ、消毒のする必要のない無農薬のお茶づくりしかなかった。(冊子より)

更に紅茶、しょうが紅茶を作り、「ほんもの」の味を追求しながら、これが「天の紅茶」「わたしの紅茶」というものを作り出していく。

紅茶の製品として使えない部分をしょうが紅茶に利用できないかと考えたが、いいものができなかった。最高の紅茶と最高のしょうが、どちらも本当にいいものでないと「ほんもの」の味が出ない。最高の紅茶と最高のしょうが、どちらも本当にいいものでないと「ほんもの」の味が出ない。(冊子より)

《 第4章：広がる活動 》

天野茂さんの様々な活動を取り上げる。

神奈川学園中学3年生のフィールドワークでの生徒たちの様子や感想か



ら「豊かさとは何か」を考えてきた山の生活体験を紹介する。

天野さんの所には「WWOOF（ウーフア）」という外国人が農業体験をする受け入れシステムがあり、たくさんの外国から農業体験にやってくる。その様子を紹介し、「囲炉裏のある日本の食卓」というタイトルで、2014. 7.26 B Sフジ「Table of Dream～夢の食卓」で放映されたものから天野さんの話を紹介した。

2011年4月から老舗和菓子屋さんの紅茶羊かんに天の紅茶が使われるようになった。訪問し、話を伺った内容をまとめた。

◀ 第5章：夢は広がる ▶



天野茂さんの今やこれからのチャレンジの一部ではあるが、紹介した。

天のゲストハウスといわれている、茶工場につながる部屋には、囲炉裏がある。フィールドワークの時にもお茶を煎ったり、昼食を作ったりしている。囲炉裏の周りで話をしたり、薪を入れて温まったり、ゆったりとした時間を過ごすことができる。「囲炉裏（いろり）、火をたくところが原点」と天野茂さんが大事にしている場所である、また、天野茂さんが廃材やもらってきたものを集めて作った家というのもすごいところだと思っている。

茶工場を作った時に「みんなが泊まれるところと囲炉裏がある」という部屋だけは作ろうと決めていた。人とのつながりを大事にしたい。語り合っ、学びあって、広がる活動。だから、火を焚くところが自分の原点！ (冊子より)

新たな商品開発や新たな茶工場などの紹介。息子さんたちが3代目として、仕事を継ぎ、様々な活動も広がっている。

天野茂さんは、孫に対しても、神奈川学園の生徒たちにも、ゲストハウスを訪れる学生や大人や・・・様々な人たちを受け止めてくれてい

る。「山学校」という思いは、持ち続けていると語ってくれた。

子どもたちが自然の中で力いっぱい遊んだり、自然の豊かな恵みを実感したりする経験を子どもにさせてあげたい。何かにぶつかったときにもきっと力になっていくと思うから。大人も子どもも休みたい時がある。ほっとしてゆったりとしてそんな時間を作り出したい。いろんな思いを受け止める場を作っていきたい。(冊子より)

◀ 「天野茂ものがたり」の終わりに ▶

最後に「私」への問いかけとして、3点を問題提起とした。

* 「豊かさとは何か」

豊かな自然とおいしい食べ物、豊かな時間・・・心と体で感じたい。その中で、「私」は何を選び取ろうか・・・

* 「環境問題って？」

天野さんが語る環境は、土地を使って安全な作物を作り、生活していくこと。「私」が生活の中で、できることって何なのだろう...

* 「ここに生きる」

今いる「ここ」で一生懸命やるのが、自分の道を切り拓く力。「私」は「ここ」で、何を一生懸命やりたいんだろう・・・

中学3年フィールドワークで「天の茶屋」に行った生徒に配布した感想より。



はじめ水俣に行って天野さんと会ったときは、「水俣の豊かさについて」学んだだけかなと思ったけど、冊子を読んで、たしかに山と海はつながっているなと思いました。

「囲炉裏、火をたくところが原点」というところが心に残りました。囲炉裏があり、田んぼの中にある空間はとても居心地がよくて癒されました。今後、フィールドワークのカリキュラムを検討し冊子を利用していきたい。